

提言「私たちの教会とリーダーシップ - 特に牧師の務めと働きをめぐって -」

メノナイト教育研究センター主事会

2014年5月31日

はじめに

私たちの協議会では教会の働きとリーダーシップ、指導者のあり方について学びが続けられてきました。昨年、協議会第61回総会は「日本メノナイトキリスト教会協議会信仰告白」を採択しましたが、告白文には世にあってキリストに従って生きる信仰者のあり方、教会のあり方が示されています。

総会后、執行委員会からこうした教会のあり方を踏まえて、特に「牧師」の職務、務めと働きについて理解をまとめて欲しいという要請が教育センター主事会に寄せられました。いま牧師の職務について考えるというと何故かと思われる方もおられるかも知れませんが、最近では札幌ベテル教会(2012年)、帯広教会(2014年)があたらしく牧師を選任しています。この間このように群れの中から牧師を立ててきた教会の事例、また他の教派から牧師を招聘した教会の事例を私たちは経験しています。牧師たちの出身神学校も多様です。このことはまた学んできた神学的な背景、教会観や教職観も多様であるということも意味しています。

伝道者、働き人があらたに加えられることは教会、協議会にとって大きな恵みです。しかし振り返るとこれまで牧師の務めと働きについて、また教会は誰を、どのように励まし牧師として立てていくのか、牧師となる要件とは何かなど具体的な問題での共通した理解が私たちに欠けていたようにも思います。協議会の性格を考え各教会の自主性を重んじつつも、しかし協議会としてこれらの点について必要な認識を共有し、それぞれの教会がキリストのからだとして建て上げられ、宣教する教会として互いの協力を深めていく、この提言がそのための学びや話し合いに資することができれば幸いです。

私たちの基本的な立場

提言を作成するにあたり私たちは

- ① 自立した各個教会の共同体としての協議会の性格、
- ② 新約聖書におけるリーダーシップ、指導者の理解、
- ③ アナバプテスト・メノナイトの教会としてのあり方、

を重視しました。このことは教会の成り立ちや運営のモデルを考える際に大変重要になります。先ず私たちの教会観が述べられ、その教会に仕える働き、役割のひとつとして牧師の働きが述べられます。最後に牧師の選任と務め、また具体的な働き方に関して提案がなされています。

歴史的に日本のキリスト教会の多くは「監督制」あるいは「長老制」という教会制度の影響を受けてきました。そこでは牧会の働きにつく聖職者や教職者は信徒とは異なる一種の身分または権威を与えられています。これは私たちの理解とはかなり異なっています。

たとえばカトリック教会では司祭はサクラメント(秘蹟)である叙階を通じて信徒とは別の身分である「聖職者」に任職されます。サクラメントである以上叙階は本人の意思にさえ関わりなく終身有効とされます。宗教改革から生まれたプロテスタント教会は「万人祭司」の立場から聖職という概念と呼称を斥け、「教職者」としました。プロテスタントではこうした教職者あるいは牧師は「万人祭司」の原則において信徒と同じ身分です。しかし日本における最大のプロテスタント教派である日本基督教団では

その教憲教規に各個教会総会の議長を正教師ないし補教師である牧師に、また教団総会議長、副議長、書記という中枢の3役も正教師である牧師に限ることを定めています。これは欧米のメノナイトも含めたプロテスタント教会と比較しても際立って教職（牧師）中心的であり、やはり私たちの理解とは異なっていると言わざるを得ません。そしてこうした教職（牧師）中心主義は他の日本のプロテスタント教会や教団にも共通して見る事ができるように思います。

先に触れたように私たちはアナバプテスト・メノナイトの教会観を重視し、同時に北海道のメノナイト教会の必要と現状を考えてきました。私たちは次のように考えます。

- ① 教会は神の民であり、キリストの信徒の共同体である。牧師も信徒の一員であって、信徒から選ばれ、立てられる。
- ② 牧会は先ず教会に対するイエス・キリストのわざである。キリストの委託を受けてそれぞれの教会で牧会の働きが担われる。この働きは教会によりさまざまなかたちを取る。特定のモデルを唯一のものとせず、複数のモデルがあると考えます。
- ③ 牧師が立てられるとき、その要件となるのは教会と兄弟姉妹たちに仕え、導くようにとのキリストの招きであり、その招きへの応答、そしてこれに対する教会の祝福と承認である。召命と共にその共同体からの承認が不可欠である。そこに私的な栄誉や利益を求める利己心が働くことがあってはならない。
- ④ 牧師が立てられ、選任される時、それぞれの教会は単独でなく近隣の兄弟姉妹教会、地区の連絡会議、あるいは教会相談窓口など執行委員会のしかるべき機関と緊密な相談や連携を図りながら進める。牧師の選任はその教会だけではなく協議会全体の交わりと働きにも関わるからである。全体の理解と祝福のうちに選任が進められ、認められることが望ましい。

参考図書：

比較的皆さんがお持ちの図書に限ってあげてみます

- ・『教会 - イエスの共同体』（ジョン・ドライバー著、すぐ書房）、
- ・「ミニストリーについて」、「天幕作り宣教論」（『いずみ』6号所収）、
- ・「教会におけるリーダーシップと権威」（同18号所収）、
- ・『アナバプテストのクリスチャンとは何か』（パーマー・ベッカー著、メノナイト教育研究センター）、
- ・『日本メノナイトキリスト教会信仰告白 - 本文と解説』（日本メノナイトキリスト教会協議会）所収の各文書、
- ・『素顔の再洗礼派』（スチュアート・マレー著、シャローム出版、2013年）

英語では米国のアナバプテスト・メノナイト聖書神学校（AMBS）の教師たちが著した以下の本が最近の米国教会の牧師、牧会の事情を伝えています

・ *The Heart of the Matter - Pastoral Ministry in Anabaptist Perspective* (Cascadia Publishing House、2004年)

教会 - キリストに従う神の民

「ふたりまたは三人が、わたしの名によって集まっている所には、わたしもその中にいる」(マタイ 18・20)。

「しかし、あなたがたは、選ばれた種族、祭司の国、聖なる国民、神につける民である。それによって、暗やみから驚くべきみ光に招き入れて下さったかたのみわざを、あなたがたが語り伝えるためである」(第1ペテロ 2・9)。

教会は主イエス・キリストに聴き従う神の民です。教会は「信じる者の共同体」(協議会信仰告白第2項)であって、その一人ひとりにはキリストの弟子です。主イエスはこの教会において私たちと共にいて下さいます。そして主は私たちに歩むべき道、進むべき方向を示されます。教会はその導きを受けながら神の国の福音を宣べ伝え、キリストの救いのみわざを語り伝えます。教会は共に弟子の道を歩む兄弟姉妹の宣教共同体です。

新約聖書で「教会」と訳されているギリシア語のエクレスシアは古代ギリシアにおける市民集会あるいは議會を指した言葉でした。主イエスは福音書のなかで2回この言葉に言及しています(マタイ 16、18章)。この集会ではすべての構成員が多く重要な議題を話し合いました。こうした市民全員の話し合いによって問題の解決や合意が図られました。このことを考えると新約聖書が教会に対してエクレスシアという言葉を用いていること自体、本来キリスト教会があるべき姿、あり方が示されていると言うことができます。すなわち教会は特定の人びとが中心にいて特定の人びとだけが物事を決めていく組織ではあり得ないということです。教会では招き入れられているすべての人びとが意志決定やその他の働きにあずかります。

教会 - キリスト信徒の共同体

このように教会がキリストの信徒(信仰者)の共同体であるということが私たちにとって大変重要になります。新約聖書の教会にはキリストの信徒しか存在しないからです。そして信徒とは別に司祭や牧師という別の身分、別の階級が存在するわけではありません。彼らは「聖徒たちをととのえて奉仕のわざをさせ、キリストのからだを建てさせる」(エペソ 4・12)という役割、すなわち牧会の働きを担うキリストの信徒であるということが新約聖書の理解です。

ユダヤ教では世襲的身分や階級として祭司職を置きました。カトリック教会も信徒とは別に司教、司祭という聖職者を教会内に置きました。このカトリック的教会観を否定したのはプロテスタント宗教改革でした。それゆえにプロテスタント教会は「万人祭司」「普遍的祭司職」を主張しました。信徒の一部が機能として牧師として務めを果たすということです。繰り返しますがこれが信徒と牧師職に関する新約聖書の立場なのです。

第1ペテロ 2・9は教会に属する私たちの全てが「祭司の国」、神の民であると教えています。キリストの教会においてこの召しに関係のない者、あずからない者は一人も存在しません。近年、洗礼をキリスト信徒としての「**基本的な按手**」(the basic ordination)と理解する立場が有力になっています。これは新約聖書の教会観にそくした適切な理解だと思えます。召命や按手、献身は牧師にのみあてはまるものではありません。キリストの弟子へと招かれる召命、洗礼における按手、そして弟子として生きる献身、これは牧師もその一員であるすべてのキリストの信徒にあてはまるからです。

私たちの教会における牧会の働きの多様性

私たちの協議会において教会がさまざまなかたちで牧会の働きを担っている現状を確認したいと思います。ここは他のプロテスタント教会と異なるところです。たとえば意識的に牧師という務めを置かずに単独もしくは複数の教会代表を置いている教会があります。また牧師を置いている教会もあり、そのなかには教会代表と牧師を共に置いている教会もあります。現在は牧師を置いていませんが牧師を求めている教会もあります。奉仕している牧師も教会からのフルサポートを受けている牧師、部分的なサポートを受けている牧師、サポートを受けず社会人として職業を持ち働いている牧師がいます。このように私たちの牧会の働きと担い方は多様です。私たちはこの現状をそれぞれの教会の歩みのなかから生まれてきた牧会の働きの豊かさと考えています。ある特定のモデルを絶対化せず、それぞれの教会がこれまでの歩みと必要を考えて最もふさわしいあり方を祈り求め、選ぶことが大切だと私たちは考えます。

牧会者、牧師の務めと働き - キリストにあるビジョンを告げひろめる奉仕者

「わたしは、神の言を告げひろめる務めを、あなたがたのために神から与えられているが、そのために教会に奉仕する者になっている」(コロサイ 1・25)。

「そして彼は、ある人を使徒とし、ある人を預言者とし、ある人を伝道者とし、ある人を牧師、教師として、お立てになった。それは、聖徒たちをととのえて奉仕のわざをさせ、キリストのからだを建てさせ、わたしたちすべての者が、神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致とに到達し、全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで至るためである」(エペソ 4・11～13)。

コロサイ書 1・25 のパウロの言葉は牧師の務めと働きを考えるうえで大変示唆に富むと思います。勿論牧会の働きを担うすべての人々にとって同様です。ここで言われている「神の言を告げひろめる」という務めは、神の唯一の御言葉であるイエス・キリストを宣べ伝えるという意味で理解できます。私たちは地上にありつつ、神の国(神の支配)に生きるようにキリストによって招かれています。この神の国の福音であるキリストの教え、そしてその生涯と死、復活のすべてを伝え、広めるということです。それによって他の兄弟姉妹たちが証しや宣教の働きを行なう際の助けになると共に、教会全体が正しい方向性を見出し、教会内の様々な賜物や働きが組み合わされ、教会はキリストのからだとしてさらに建て上げられていきます(第1コリント 12・4から 11、エペソ 4・8)。牧師の最も重要な務めはこのキリストにあるビジョンを教え、語り伝えることです。

ベッカーは「アナバプテストのクリスチャンとは何か」のなかでアナバプテスト・メノナイトが大切にしてきた、そしてこれからも守らなければならない 3 つの中心的価値を紹介しています。①イエス・キリストがわたしたちの信仰の中心である、②共同体がわたしたちの生活の中心である、③和解がわたしたちの働きの中心である。そのうえで「それはわたしたちの信仰、所属すべき場所そして働きに深い影響を与えます」と述べています。この 3 つの中心的価値はキリストのビジョンから生まれてきたものです。教会形成と牧会においてつねに大切にされなければなりません。

牧会において牧師は兄弟姉妹たち一人ひとりが自立したキリストの信徒、キリストの弟子になるために適切な助言や励ましを与えます。同時にその働きの中で自分自身も弟子として成長する必要があります。兄弟姉妹たちの自立を願うのであって、彼らを支配し依存させるようなあり方を斥けます。参考書として紹介した *The Heart of the Matter - Pastoral Ministry in Anabaptist Perspective* では牧師を教

師、預言者、癒し人、思慮深くケアを与える者として描いています。言葉の正しい意味でそのとおりです。

次にパウロが自らを「教会に奉仕する者」と自己規定していることに注目したいと思います。この「奉仕する者」はギリシア語でディアコノスであり、当時の社会では尊敬されない仕事のひとつとされた給仕の仕事を目指す言葉でした。パウロは「使徒」という務めに対してこのような言葉を用いてそのあり方を述べているのです。そしてこのことは私たちに対して給仕する者となられたイエス・キリストご自身に根拠を持っています（ルカ 22・7）。それ故に新約聖書の指導者の理解は「人々の上に立ち、力を振るう」というこの世的な権威や支配とはまったく無縁です。そうではなく新約聖書はひとりのキリスト信徒として同胞である兄弟姉妹に仕える指導者像をこそ伝えています。

教会における牧会のあり方 - チームリーダーとしての牧師

新約聖書は牧会に関わる務めを種々記しています（使徒、預言者、教師、牧師、伝道者、監督、長老、執事など）。これらがひとつの教会内に複数存在していたことも明らかです（第1コリント 12・28 から 30、エペソ 4・11、第1テモテ 3・1 から 13、5・17 から 21）。このことを考えるとひとりの牧師だけが教会を代表し、教会の運営や多くの働きを指導する「単独牧会」は聖書的根拠が乏しいと言わざるを得ません。事実「単独牧会」において教会の主だった奉仕の働きはしばしば牧師だけに限られてしまい、教会員は牧師に依存する傾向が強まります。むしろ新約聖書の教会運営、牧会のあり方は牧師を含めた複数の人々による「共同牧会」、いわゆるチーム・ミニストリーです。3世紀以降、教会が司教を頂点とするカトリック的な位階制度に移行していくなかで「共同牧会」は見られなくなっていくます。それは本来の教会のあり方ではありません。それ故本来的には牧師は教会員から選ばれた教会役員と共に働き、そのリーダーシップを発揮して他の兄弟姉妹たちの賜物を十分に引き出し、すべての人がそれぞれの仕方ですさわしく宣教や奉仕の働きに向かえるようにチームの中のリーダーあるいはコーディネーターとして仕えることが望ましいと思います。

チームリーダーとしての牧師を考える時、たとえば山岳パーティーのリーダーの役割を思い起こしてみてもできます。登山ではパーティーのリーダーは最後尾にいてチーム全体を見渡し、声をかけ、間違ったルートをたどらないように目を配ります。また弱った仲間の荷物を背負い、脱落者が出ないように皆を励まし、力づけます。教会の場合、先立って私たちを導かれるのは神ご自身であり、イエス・キリストです。先立つ方の指し示す方向を見失わないように努めること、そして教会の一人ひとりが共に歩みを進めるように援助することがリーダー、牧師に期待される役割ではないでしょうか。

提案

1. どのように見出し、立てていくか

牧師としてふさわしい兄弟姉妹を立てようとする時、誰が、どのようにして対象となる兄弟姉妹を見出し、励ましていくのでしょうか。これまで各教会レベルでの働きかけはありましたが、協議会全体としての取り組みは十分ではなかったように思います。いまリーダーシップの世代継承は多くの教会の重要な課題です。このためにもあたらしい人材を積極的に見出す努力が協議会全体に求められています。

対象となる人材について各教会の状況を踏まえて互いに話し合える場、さらに教会を超えた連携、協力が必要です。各地区の連絡会議、全道連絡会議、協議会総会、教育研究センターが主宰している教会

懇談会、執行委員会の教会相談窓口や教育研究センター主事会などでの取り組みが求められると思います。こうした場での話し合いから各個教会を越えた教会同士の連携が生まれ、たとえば十勝地区で行なわれているように複数の教会がひとりの牧師の働きを支えるというあり方も模索され、生まれる可能性もあります。地区や全道のレベルで牧師が有効に働きそして活用されるさまざまな可能性を考えたいと思います。

2.牧師の資格あるいは要件について

牧師としての資格、要件を考えてみます。たとえば日本基督教団では教団立もしくは認可神学校を卒業後、補教師試験を受けて准允され、さらにその後正教師試験を受けて按手を受けます。補教師から牧師として働きますが、聖礼典の執行は正教師になって許されます。独学で試験を受ける制度もありますが教師試験に通ることが求められます。

私たちは先に牧師の要件として召命と応答、そして共同体からの承認が不可欠であると述べました。私たちは必ずしも神学校の卒業をその資格、要件とは考えません。神学校の中には特定の教派的立場を強調し、アナバプテスト・メノナイトの信仰理解や教会観とはかなり異なる神学的背景を持つ学校もあります。神学校で学ぶ場合は学校の選択も重要です。教育研究センター主事会などとも相談して頂きたいと思います。先に述べたように最も重要な要件は神の国の福音、キリストにあるビジョンを教え、語り伝えることであり、ひとりのキリスト信徒として同胞である兄弟姉妹たちに謙遜に仕え、導くことであり、さらに独善に陥らずに人びとと協力して共同牧会、チーム・ミニストリーの中でリーダーシップを発揮できることであると私たちは考えます。

しかしこのことは決して神学教育や学びを軽視するものではありません。こうした学びが独りよがりの聖書解釈やアナバプテスト・メノナイトの立場を離れた信仰理解、教会理解に陥らないために必要不可欠であることは言うまでもありません。真摯に学ぶ者だけがよく教えることができます。学びには独習と共に共同の学びがあります。教育研究センターの各種講座や特別セミナーの受講が可能です。さらにもし条件が整うのであれば国内外のふさわしい神学校を選択してパートタイムやフルタイムで学ぶことも可能でしょう。今後は教育研究センターとしても牧会者セミナーなど指導者、牧師向けに充実させた継続教育の学びの場を提供していきたいと考えています。

3.牧師の選任とサポートについて

先に「牧師の選任はその教会だけの問題ではなく協議会全体の交わりと働きに関わるものである。全体の理解と祝福のうちに進められ、認められることが望ましい」と述べましたが、教会があらたに牧師を選任する時、その教会員や近隣の教会の兄弟姉妹が手を置いて祝福することは喜ばしい機会、また牧師として立つ者への励ましとなります(民数記 27・18-19、申命記 34・9、使徒言行録 13・2-3)。こうした教会員が参加し祝福する按手のかたちは「叙階」や「按手礼」のような礼典的な儀式ではなく、より新約聖書的でありまた会衆主義をとる教会が守ってきた良い伝統でもあります。

また先に述べたように牧師へのサポートの仕方も教会毎に多様さがあって良いと思います。フルサポートを受けてすべての時間を教会への奉仕に専念する牧師、また社会の中で職業に就きながら教会に奉仕する牧師もいます。かつて米国のメノナイト教会では農家や手工業などに従事しながら牧師となることは珍しいことではありませんでした。これは使徒パウロが選択した天幕作り伝道を模範としています。

いまでもこうした伝統は残されています。日本の教会でも社会人として職業を持ち、生活を自活自立させるという牧師のあり方を再評価する動きが始まっています。こうした牧師たちを中心に「自給自立伝道連絡協議会」というネットワークが作られ、情報の発信が行なわれています。どのようなサポートを行なうか、どのような牧師を必要とするかはそれぞれの教会が考え、決めるべき事柄です。

同時に忘れてならないのは牧師とその家族の生活への配慮です。牧師も他の教会員と同じくひとりの生活者です。教会は牧師と家族の生活を親身に考え、そのための深い配慮が求められます。勿論こうした配慮は共同体のすべての兄弟姉妹たちとその家族に対しても向けられなければなりません。そのためにも牧会の働きが教会に置かれています。互いに配慮し合うこと、いたわり合うことを教会生活の中で忘れないようにしたいものです。

4. 「キリストの規範」(マタイ 18・15～18) を軸にした牧会のわざ

教会のさまざまな生活の場で牧師と他の教会員は互いに「愛をもって真理を語る」(エペソ 4・15) 関係性を維持していくために努めます。真の教会における兄弟姉妹のあり方として 16 世紀のアナバプテスト、再洗礼派はマタイ 18・15～18 にあるキリストの勧めを重んじました。彼らはこの箇所を「キリストの規範」と呼んでいます。教会内の問題、また兄弟姉妹の過ちはただちにこのキリストの勧めによって対処されました。これを放置し、目をつぶることは愛の行いでも赦しでもありません。それは無責任な行為であり、教会の交わりを破壊する危険をさえはらんでいると考えられました。またこうした交わりにおける相互の訓戒は決して裁きや管理ではありませんでした。過ちを指摘する側にも真摯な自己吟味が必要とされました。何よりもその目的は不健康な問題から教会を救うことであり、兄弟姉妹を再びキリストのために得ることでした。教会はこのキリストの規範に従って歩むことによっていのちを与えられ、すべての兄弟姉妹はいきいきと教会生活を送ることができます。

牧師はまた周囲から信仰者としての正しさや指導力を常に期待されることがあります。たしかに世に対して、他の兄弟姉妹たちに対して「愛をもって真理を語る」ことに臆病であってははいけません。しかし同時に「わたしの力は弱いところに完全にあらわれる」と使徒パウロに臨んだキリストの言葉に力づけられて自分自身の弱点や欠け、不完全さや誤りを認める勇気も必要だと思います。多くを期待されるが故に自分を実際よりも「強い者」、「良い者」に見せようとする無理から多くの逸脱が生じます。やはりパウロの以下の言葉に耳を傾けて、教会の指導者や牧師ほど神の前に見せかけではなく真実に砕かれた者、謙虚な者でありたいと思います。

「兄弟たちよ。あなたがたが召された時のことを考えてみるがよい。人間的には、知恵のある者が多くはなく、権力のある者も多くはなく、身分の高い者も多くはない。それなのに神は、知者はずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者はずかしめるために、この世の弱い者を選び、有力な者を無力な者にするために、この世で身分の低い者や軽んじられている者、すなわち、無きに等しい者を、あえて選ばれたのである。それは、どんな人間でも、神のみまえに誇ることがないためである。あなたがたがキリスト・イエスにあるのは、神によるのである。キリストは神に立てられて、わたしたちの知恵となり、義と聖とあがないになられたのである。それは、『誇る者は主を誇れ』と書いてあるとおりである」(第 1 コリント 1・26～31)。